

学びの意味を伝える指導が 大学選択の視点を変える

「日常生活に役立つ」「将来望む仕事に就くために必要」など4項目を聞いたところ、肯定率は、49か国(数学)、29か国(理科)の中で、いずれも最下位グループに位置している。

また、経済協力開発機構(OECD)が高校生を対象に2003、2006年に行った「生徒の学習到達度調査(PISA)」では、数学的リテラシー、科学的リテラシーの平均得点は調査国の中でいずれも上位だったが、「教科に対する自信や興味はあるか」「学習と自らの将来との関係を把握しているか」の問いに「はい」と答えた割合は、他の参加国に比べて極めて低かった。

これらの国際比較調査から、学力は高いものの、「この教科はつまらない」「勉強をしても何の役に立つかわからない」「仕方なくやっている」と感じながら勉強をしている日本の中・高生の現状が浮かび上がってくる。背景には、教員も生徒も眼前の入試に気を取られ、その先の目標を見失っている問題がある。教員は、「ここは入試に出るぞ」という言葉をよく口にする。生徒は、今取り組んでいる学習は受験のためのものと受け取り、将来の夢や職業と結びつけて考えない。

中等教育のもう1つの問題は、人間関係の土台づくりがうまくいっていないことだ。厚生労働省職業安定業務統計によると、2008年度に高校を卒業して就職した後、3年以内に離職した割合は約4割で、その約半分は1年未満で離職している。原因として、働くことの意味がわからないまま、人間関係でつまづく人が多いことが挙げられ

る。社会に出ればいろいろな考えを持った人と、新しい人間関係を築かなければならない。しかし、そうした経験に乏しいため、自分と意見の違う上司や同僚、顧客との関係に悩み、自分から「合わない」と見切ってしまう。

中等教育の問題が 大学の負担につながる

このような中等教育の問題は大学にも影響を及ぼしている。受験を目的に勉強してきた生徒は、学習意欲や知的好奇心が希薄なまま一時的に大量の知識を詰め込んでいるため、受験を終えると、その知識が簡単に剥落してしまう。その結果、大学の授業についていけない学生が続出することになる。大学はそれらの学生をフォローしなければならず、負担は増える。

また、日本学生支援機構によれば、大学の相談窓口を訪れる学生の6割強が、人間関係の悩みを抱えているという。他人と上手にコミュニケーションが取れず、友達や相談できる相手もなく苦しむ。勉強も人間関係もうまくいかずに、ついには大学に意味を見いだせず中途退学して、行き場を失うことになりかねない。

断片化された知識の集積については、日本の教育システムはとて優秀で、世界各国の注目を集めるほどだ。しかし、学んだ先に夢を持たせる指導や、人間関係を築く力を養う教育が欠落しているのはとても残念である。

社会を豊かにする 大学選びへの転換を

この状況を打破するには、中学校、高校の教員が、学びの意味を伝える指導、人間関係をつくる指導に力を入れることが望まれる。今、学んでいる学

問の先に何があるのかが理解できれば、おのずと学びの意味を考えるようになる。いろいろな人と交流することによって、社会に出ても少々のことでは折れない心を手に入れられる。

生徒に知ってほしいのは、電気があり、空調が整い、交通網が発達し、離れた人との通信が容易にできる今の快適な生活のすべてが、さまざまな学問の上に成り立っているということだ。生活の瞬間を切り取って、教科の内容と結びつけることによって、生徒の知的好奇心の扉を開けることができる。知的好奇心が高まった生徒は、将来自分自身が知の集積のどの部分を担い、次の世代にどのようにバトンを渡すかを考えるようになるだろう。

これを繰り返すことによって、現在の学びの意味がわかるようになれば、知名度や入試難易度を基準にしていた大学選びが、自分の夢や将来を見据えて、社会を豊かにする一員となることを目的としたものへと変わっていくに違いない。

高校の学習指導要領の「特別活動」には、「望ましい人間関係を形成することが明記されている。時には自習の時間にあてられる場合すらあるこの時間をもっと活用すれば、生徒同士での意見交換の機会をいっそう増やすことができる。

さらにインターンシップや職場体験、ボランティアなど、異なる年齢層や価値観の人と出会う機会を設ければ、多種多様な考え方があり、さまざまな人が社会を構成していることを感じられるようになる。自分たちが知らない世界がまだまだあることに気づき、学問の奥深さやおもしろさ、学びの醍醐味を知ることになるだろう。こういった過程を経た人間を社会に送り出すことが、中学校、高校の大きな役割の一つと考えている。

大学は高校だけでなく 小中も視野に連携を

大学は、入学してきた学生を教育するだけでなく、中学・高校段階での教育や人間形成にも、もっと干渉すべきである。それは決して中等教育への貢献にとどまらず、大学自らのためにもなる意識を変える時期に差し掛かっている。

自学が望む学生を迎え入れるためには、より早い時期から知的好奇心を喚起し、大学での学びに関心を持たせることが必要だ。高大連携は多くの大学が力を入れているが、さらに視野を広げ、中学校、小学校にも目を向けるべきだろう。大学の学びが実生活にどう結び付いているのかを話したり、大学の研究をわかりやすく教えたりすることによって、興味を抱かせることができる。小・中学生対象の授業が、教授法の改善につながるなど、大学にとってもメリットがあるはずだ。

中等教育に大学が直接的に関与するのは難しくても、何らかの取り組みを通じて大学生の姿を中学生や高校生に見せることは、比較的ハードルが低いのではないだろうか。

ある大学では、企業へのインターンシップ期間の最後の数日間に中学生の職場体験が重なるよう企業に協力してもらい、学生にチューターとして中学生の指導をさせている。中学生にとっては社会人に指導されるよりも親しみが持てるし、学生も指導を通して仕事の内容をより深く理解できる。別の大学では、学生がボランティアとして中学生の補習を手伝う取り組みも行われている。

「ナナメの関係」とよく言われるが、大学生を身近なものに感じさせることは、生徒自身の未来を想像させる効果があるはずだ。(談)



国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官

藤田晃之

ふじた・てるゆき

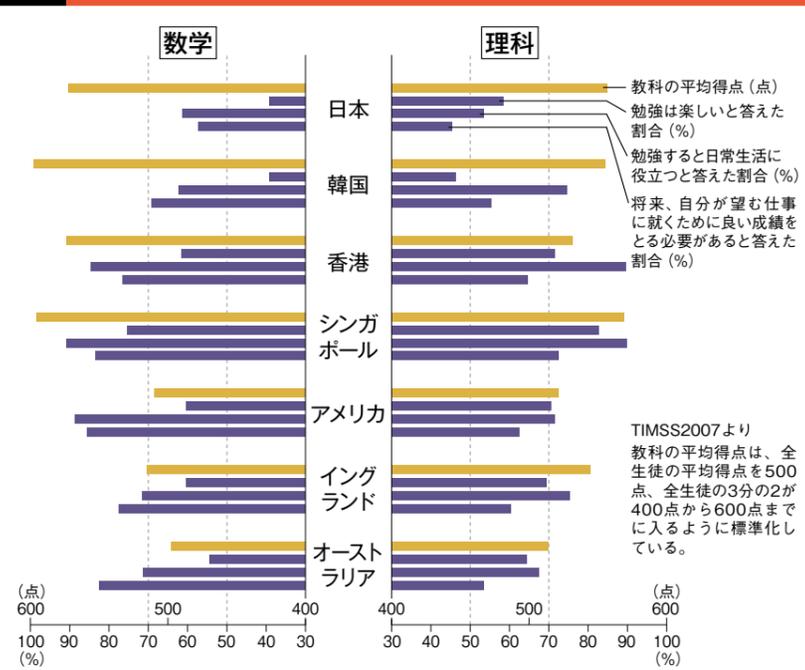
筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位修得満期退学。筑波大学教育学系講師、同大学助教授、同大学大学院博士課程准教授などを経て、2008年から現職。教育学博士。専門はキャリア開発教育論、進路指導。

成績は良いが 学習意欲が低い中・高生

日本の中等教育が抱える問題は大きく2つある。1つは、生徒の学習意欲が低いことだ。国際教育到達度評価

学会(IEA)が行った「国際数学・理科教育動向調査の2007年調査(TIMSS2007)」を見ると、日本の中学生の教科学力は、数学、理科ともに、先進国の中でトップクラスだ。しかし、数学、理科の学習について、

図表 中学生の学習に関する意識と教科の得点



出典/国立教育政策研究所生徒指導研究センター
「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」(中学校向けキャリア教育推進パンフレット) 2009年